

# くろさわと き 黒澤止幾

女性教師のさきがけ 城里町



(黒澤清一氏提供)

文化3年(1806)-明治23年(1890)。茨城郡高野村〔城里町錫高野〕の修験者黒沢将吉の長女に生まれ、祖父に読み書きなどの教える。夫と死別後、錫高野の実家に娘たちと戻り、行商などで家計を支える一方、俳諧・狂歌等を学ぶ。嘉永4年(1851)、群馬県草津で初めて門人をとり、安政元年(1854)、実家の寺子屋を継ぐ。幕末の混乱の中、謹慎処分となった水戸藩前藩主徳川斉昭の無実を天皇に訴えるべく、安政6年(1859)、京に上る。長歌を献上した後、幕府の役人に捕われ、江戸に送られるが、取調べ後追放となり、帰郷後は再び自宅の私塾で教育に力を尽くす。明治5年(1872)の学制発布の翌年、自宅を小学校として開放、自身も教師となる。

黒澤止幾は文化3年(1806)、茨城郡高野村〔城里町錫高野〕に生まれました。家は修験道場を宮むかたわら寺子屋を開いていて、止幾は幼いころから祖父に読み書きを教わっていたので、難しい本も読めるようになりました。

19歳のとき結婚しましたが、夫に早く死なれ、27歳で娘二人とともに実家に戻りました。自分の母と娘との女四人の生活を支えるために、くしやかんざしなどを売り歩いて、上野国〔群馬県〕や下野国〔栃木県〕まで出かけました。一人で行商を続けるかたわら、よい先生を見つけるとその機を逃さず積極的に勉強しました。特に文学に興味を持ち、俳句や和歌を習い、また行く先々で多くの人たちと出会って影響を受けているうちに、止幾は様々な知識を身につけることができたのでした。

嘉永4年(1851)、46歳になったとき、行商先の草津温泉の町の人に請われて、初めて子供たちに読み書きを教えることになりました。その後、安政元年(1854)、ふるさとに帰り、実家で開いていた寺子屋を継ぐこととなります。寺子屋で教えている様子について止幾の残した日記を見ると、

「堀へ落ちてすぶぬれになった子をはだかにし、着物を洗って干した。」

「手習いの子19人が来て、書き初めを習う。その子らに餅をふるまう。今日はことに寒く、皆凍えていたので、火にあててやる。」といった、心温かい止幾先生の毎日をうかがい知ることができます。

そのころ水戸藩の前藩主であった徳川斉昭(P.43参照)は、外交問題などで幕府と対立し、自由な行動を禁じられる謹慎という罰を受けてしまいました。

(これからの日本を考えている殿様に罪はないのに…。水戸藩の侍たちもいろいろ手をうっては



止幾の日記帳 (茨城県立歴史館蔵)

いるようだが、次々捕まるばかり。自分は女で身分は低いけれども天皇を敬う気持ちは強く持っているつもりだ。ぜひ天皇に訴えて、殿様の無実の罪を晴らさなくては。）

安政6年（1859）2月22日、54歳の止幾は年老いた母を残して京都に旅立ちました。捕らえられればどんな罰を受けるかわからない命がけの旅です。女性の一人旅が怪しまれないよう、信濃国〔長野県〕経由の道を選びました。寒さ厳しい時ですから雪も深く大変な道のりでした。3月25日にやっと京都に着き、公家に出入りしている人物に天皇への長歌を託しますが、幕府に気づかれ、大坂〔大阪市〕で捕えられてしまいます。

はるか関東からの女性の一人旅は当時ほとんど考えられなかったこと、公家出身だった齊昭夫人の密かな使いなのではないかということ、長歌がとてもよくできていて、他の誰かが作ったのではないかということから、止幾は厳しく尋問されました。その後重罪人護送用のかごに乗せられ江戸へ運ばれた止幾は、途中の宿場宿場で大変な見物人を集めたそうです。江戸での取調べに「すべて一人で考え行動した。」ことを述べ、ようやく牢屋から出されたのは、大坂で捕えられてから約7か月後の安政6年10月27日のことでした。

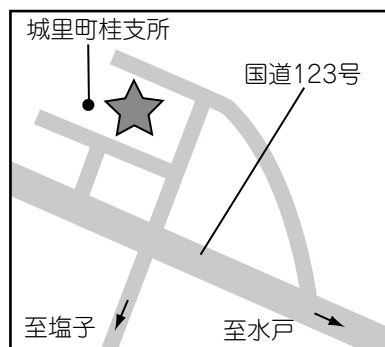
故郷に戻った止幾は、再び自宅の私塾で教え始め、やがて明治維新を迎えます。明治5年（1872）、学校の制度に関する規定が定められ、その翌年、止幾の住む錫高野にも小学校を作ることになりました。このとき止幾は68歳になっていましたが、村長にぜひにと頼まれて自宅の塾を小学校とし、自身も教師となりました。その後も止幾は、85歳で亡くなるまで、郷里の子供たちの教育に力を尽くしました。

## ゆかりのスポットに行ってみよう

### 城里町立桂図書館・郷土資料館

所在地 東茨城郡城里町阿波山173-2

内容 パネルや写真などで、黒澤止幾について紹介しています。



### おもな 参考文献

『黒澤止幾一生誕二百周年記念誌一』

（黒澤止幾生誕二百周年記念事業実行委員会・2006）

『茨城の顔』（室伏勇・茨城新聞社・1969）